第 31 回しんわ美術展 講評

審査員　大豊　世紀

審査員　池田　良則

【総　評】

　昨年に比べ応募点数がかなり増えました。より良い展覧会になるため、出品数が増えることは必須なので喜ばしい状況です。全般にレベルが高く選外になった作品にも惜しいものが多かったように思います。各ジャンルとも具象性の高い作品が多い傾向ですが、それぞれの表現は多岐にわたり個性的なものが目立ちました。特に賞の選考にあたり、優劣が付けがたく熟考を要しました。作者の意を汲み、製作意図を重視した選考に努めたつもりです。岡山県内にとどまらず、県外からも質の高い出品が多くあり全国レベル有数の展覧会になったものと思います。

【各受賞作品評】

＜文部科学大臣賞＞

永原　和子　洋画　《日記ＫＡＺＵ－秋》

　私は初めて拝見する絵ですが、御自分の精神世界を持った上での造形力、もしくは画力を持ってそれを再構築されている、観る者を絵の中へ引き込む魅力を持った作品です。ファンタジックでありながらも地球環境を憂いておられる様でもあり静かなメッセージ性も感じられます。正方形の画面も額も含め、カンバスからはみ出した絵画部分もトータルでの作品にしておられます。受賞おめでとうございます。

＜グランプリ＞

稲岡　　篤　日本画　《町・肆》

　巧みな構成で、現実とも虚構とも思える世界を編み出しています。色彩に冴えがあり、際立ったイメージを持った作品となりました。若い人の瑞々しい感性が作品の鮮度となり、ややもすると地味になりがちなモチーフを全く別の風景としてとらえていることに共感を覚えました。

＜金　賞＞

小林　　基　洋画　《地の華》

　抽象画の解釈というのは難しいと言えば難しいのですが、この作品の持つ力は理屈では無く先ず目に飛び込んで来るインパクト、それは感性で観るものです。強い色の色面構成は偶然の様に見え乍ら計算され尽したものでオレンヂと黄色が圧倒する画面での捕色たるブルーと黄色の間に垣間見えるグリーンのパーセンテージ走る筆のムーブメント、絵具の流れ跡迄が計算されたものに見える、自信が無いとこういう作品は出来ない、総て作者のセンスの賜でしょうか。

＜岡山県知事賞＞

上野　留美　洋画　《はるか》

　しっかり人体を描ける方の作品であるが、背景の銀箔の処理をもう少し考えると深味のある（奥行のある）空間が生み出せたかと思います。折角の人物が銀の反射でマイナスに働いてしまっているのが残念です。技術のある作家なのでオーソドックスな描き方に徹した方が良いと思われます。世界地図（太平洋上）に座っているのも思わせ振りですが、変化球投手で行かない方

が作家本来の力量が判るでしょう。

＜銀　賞＞
塩見　　秀　日本画　《花の季》
　背景に花を造形的に配置していますが、其の在りようは説明的ではありません。象徴的であり造形的であり、暗喩的でもあります。抑えた色調ながら、テクスチャーの工夫が凝らされ、作者の確かな技術が作品の意図をうまく支えています。若い女性の、未来に対する予感を感じさせて抒情性がよく出た作品になったと思います。

＜銀　賞＞
柾木　　高　洋画　≪転生（タンポポ）≫
　想いの伝わって来る作品です。身近な方が亡くなったのか（思い過ごしか）重いテーマではあるものの、タンポポの綿毛に生命の再生を込めて、明るい色調の余白を活かした画面は観る者を黄昏の国へ誘う様です。心静かに接する作品です。

＜銀　賞＞
渡辺　敏彦　版画　《孵化（それぞれの始まり》
　綿密な構成力を感じます。卵の殻の文様はそれ自体面白いものですが、地図のようにも見えてきます。或いは社会的なメッセージがあるかのようにも感じます。美術の面白さはただ単にメッセージを押し出すだけではなく、喚起させることこそがその妙味であると再認識しました。卵の文様が何かに見えるということ現象を意識化に置くことの楽しさが見えた作品です。

＜銅　賞＞
李　　香淑　洋画　《風の思い出》
　自画像の様に思えるが、雨の日に誰を想っているのか、若い日の思い出かもしれません。色調と人物の表情からそれが伝わってきます。柔らかい画面を十字に切っている窓枠がやや強すぎるのが残念。説明せずに見せるガラスの表現は上手です。

＜銅　賞＞
家近　健二　洋画　≪想≫

雪原を背景に赤い地平線（水平）を縦に断ち切る赤い人物のインパクトが最初に目に飛び込んできます。更にその人物はレリーフ状に画面から浮き出しているから尚更です。白い雪原に不安感をあおる夜空と人物の表情は何を伝えようとしているのか、作品の前に立ち停まってしばし絵解きをしてみたくなります。

＜銅　賞＞

田名後公憲　洋画　《ＰＥＡＣＥ》

近年よく見られる描写力で見せる絵、小さな画面を大きく感じさせる絵としての存在感、カバの重量感と質感、モノトーンにした事が光の存在をかえって効果的にしているテクニシャンの作品です。亀は必要でしょうか。

＜銅　賞＞

谷　　俊緒　洋画　《つばめ》

手先で描く絵が多い中、気合いで描く動きのある作品です。羽ばたく親つばめの運んで来たエサに、腹をすかせた子つばめのピーピーという高い声が絵から伝わってきそうです。手慣れた描き方でペインティングナイフも効果的に使えるベテランの技が光っており、色調も整っています。

＜銅　賞＞

野角　孝一　日本画　《あさっての気配》

日常のある一瞬をとらえたものと思われますが、鳥との組み合わせなど独自の感覚が面白いと思いました。画面全体の構成もしっかりしています。背景の描写も適度な抑制が人物との対比をマッチさせているようです。客観的な視点による作画ですがその内容は一人称的であり、特別な物語性をも感じさせてくれる作品です。

＜津山市長賞＞

高務眞佐子　日本画　《裏庭の片隅で》

何よりも伸びやかさを感じました。こだわりなく、おおらかに描かれているのが魅力です。絵具の発色もよく力強さと瑞々しさの実現に大きく働いていると思います。端的な表現ですが、必要にして充分、絵を描くことはそんなに難しいことではないと気づかされる作品でした。

＜真庭市長賞＞
秦野　邦男　洋画　《蔵》
　ベテランの作品です。永年絵を描いて来た方だから出来る安心して観られる作品です。つまりは絵具がしっかりキャンバスに食い付いていて、時を経て来てこその蔵の存在感、重量感。その蔵と正面から向い合っている作家の姿が目に浮かぶ。只、空に重さがあり過ぎるのと左の小屋の木組は陰の中へ入れてしまえばより良かったと思います。

＜美作市長賞＞
檜尾　玲子　洋画　《生きる》
　雪の日の大樹を堂々と描いておられます。大樹に対する畏敬の念は人間共通のものですが、それを白と黒とした処がこの作品が成功している処です。重量感ある巨木に軽やかに積もる雪の表現が良いです。

＜山陽新聞津山支社長賞＞
赤木　秀明　洋画　《焦燥》
　若い作家の青春の焦燥感を絵画表現を使って表している。意欲作の登場人物の動きが、飛び散る紙（解答用紙？）が、画面全体の動きを一種の身体表現を使って（おそらく写真を使って）効果的に見せています。赤い背景もインパクトがあり、試験がやっと終わったのか気持ちの爆発が画面から伝わってきます。若くして画力のある作家の将来が楽しみです。

＜津山朝日新聞社長賞＞
矢内早由紀　日本画　≪ゆくもののごとく≫
　力強くインパクトのある仕事です。置いてあるのか吊るしてあるのか、どちらにしても非日常の設定です。画面のマチエールも荒々しく作者の強い意志を感じます。危機感、不安感、不安定など本来受け入れがたい感情もこのように絵画として昇華することにより共感でき、心を動かす作品となることを示しています。

＜奨励賞＞
浮森　夕菜　洋画　《エピソード》
　自分の絵画世界を持っておられる作家でしょう。背中で物語っている事は多いのですが、背景の空間処理に困ってらっしゃる様にも見えます。腰掛け

ているパイプ状のものも不安定要素かもしれません。鳥がとまり木に留っている様に見せたかったのかもと思いますが、人物以外の要素がプラスに働いているとは思えず少々残念。

＜奨励賞＞
金谷　　妙　洋画　《再生の街》
　画題から受ける印象は廃屋となりつつある町工場か地元産業が衰退して行く町を連想させますが、再生という希望を持って絵にされている様です。画力のある方ですので、遠景と自転車二つの視点になっている主人公をどちらかに定め観る者の目を誘う画面構成が欲しい処です。

＜奨励賞＞
河原　　裕　洋画　《屋内に黒猩々》
　チンパンジーの存在感と描写力は絵そのものの存在感になっています。動物園のオリから出られない主人公は何を想っているのか、あきらめか、もしくは満足感かチンパンジーが人間的であるがために色々深読みしてしまいます。画力のある作家ですからこれから先何をテーマに何を表現していくのか興味のある処です。

＜奨励賞＞
木口　郷史　洋画　《桂林》
　大変手慣れた筆致である。現場の感動をストレートに伝えようという作家の姿勢が伺える。群れる小舟の処理、西陽に黄色く映える水面の色、そこにゆっくり進む舟の動きが伝わってくる。作者の心の風景でもある様です。

　＜奨励賞＞
小林　雅子　日本画　《朝を待つ》
　大胆な構図と明快な色彩。丸テーブルでしょうか、大きく円を描くことにより、単なる情景描写にとどまらず、ある種の抽象性、または世界観を表出しています。背景の箔の効果もあり、写実性と装飾性の絶妙なバランスがこの作品を楽しく見せています。

＜奨励賞＞
佐伯　栄治　洋画　《向日葵》

　描写力のある作者が、枯れた向日葵と向い合ってそこから何かを描き出そうとしている姿が目に見えます。静物に向い合って制作するという事はつまりは自分に向き合っているに他なりません。風景を描く時は外向きである場合が多いだけに、この作品からは作家の内面性が感じられます。静謐ないい作品です。

＜奨励賞＞
中森　順一　洋画　《館》
　ラビリンス（迷宮）を使った一つのパターンの絵で現実か夢か判らぬ人間の不安感の中にまさに迷い込んだ作家自身の自画像でもあるのでしょう。誰もが心の奥に持っている漠然としたものを絵にして共感を誘う作品です。

＜奨励賞＞
野々上由紀　洋画　《刻（江井ヶ島）》
　江井ヶ島というのは明石の漁港かと思います。舟の一部を見せただけでコンクリートブロックと自然石の波消し護岸に水面という何と難しい絵作り。それだけでその日の気象条件まで判るベテランの成せる技です。

＜奨励賞＞
林　　寿朗　洋画　《ざわめく森の奥深くから》
　ベックリンという作家の「死の鳥」を思い出しました。作家の心の中に在る森の奥深く誰もが持つ不安感というものが感じられます。絵は想像力を持って観るものです。あるいは作家の気持ちになって観るものです。貴方には何が見えますか？自分の心の中が見えるのではないでしょか。

＜奨励賞＞
藤原　郁夫　洋画　《假象に集う》
　現実とは違う夢の中の風景に集う自らの幼少期の想い、もしくは仮想空間に遊ぶ仮想世界、つまりは作家の心の中に在る思い出や夢が、メリーゴーラウンドから流れてくるサーカスにも似た音楽と相まって観る者の心をも絵の中に引き込んでしまう様な誰もが持っている懐かしさの心情をも思い出させてくれます。イタリアのフェデリコ・フェリーニという映画監督の作品を思い出しました。

＜奨励賞＞
水上　靖子　洋画　≪スペインの風≫
　ドン・キホーテの愛馬ロシナンテらしき馬を背景に従者サンチョ・パンサのロバを想い起こします。寓話的な絵作りの上手さ。作りものにも見えるロバと童話的な背景の処理に色彩感覚の良さが心に留ります。

＜奨励賞＞
水谷　数代　日本画　≪そのさきに≫
　優しい色調の中に猫と昆虫の一瞬の出来事、些細なことにも気持ちを注ぐ作者の心情が心地よい作品となりました。きわめて抑えた表現によりかすかな音や光の変化が心を動かされます。静寂の心地よさを感じました。

＜奨励賞＞
溝口恵美子　日本画　《風の舞》
　秋の紅葉を、装飾一辺倒にならず実感を伴いながら、その美しさを細やかに表現しています。類型的な表現になりやすいモチーフですが、しっかり観察することにより、感情移入のできる作品になったと思います。視るということの意味を再認識させる、力のある仕事ができたと思います。

＜奨励賞＞
森内　　謙　洋画　《12:35》
　私にはどうも自然災害の後に見えてしまうのですが、不思議な魅力のある作品です。“絵を読む”という作業をどうしてもしてしまうのですが、地震や台風や水害が続く最近の日本。地球環境を考えさせる近未来ＳＦの様な気がします。ある種のインパクトを持った絵です。この作家はこの先何を描こうとするのか気になるところです。

＜奨励賞＞
森岡　秀行　日本画　《御所柿》
　緻密な描写が実在感を強くさせています。太陽の光を感じさせる作品です。実感に裏付けされた確かな表現が滋味あふれる画面を作っています。やや遠近感の問題が気にならなくもないのですが、圧倒的な描きこみによりそれを乗り越えています。作品に対する真摯な姿勢が印象的でした。